

知的障害と肢体不自由、視覚障害のある特別支援学校高等部 2 年の生徒が、高等学校で交流及び共同学習に参加するための合理的配慮

1. 事例の概要

A 生徒は、特別支援学校（知的障害）（以下「B 特別支援学校」という。）に在籍する高等部 2 年生の生徒である。知的障害と肢体不自由、視覚障害（全盲）が重複しており、生活全般において介助を必要とする。

C 高等学校との交流及び共同学習では、生涯スポーツ（パターゴルフ）や英語の授業等に参加した。

交流及び共同学習では、全盲である A 生徒に対して、活動しやすいように活動内容や方法を音で示すように心がけた。また、事前に C 高等学校の生徒には A 生徒への関わり方を説明した。こうした配慮を行うことで、交流及び共同学習の当日は、A 生徒も楽しく、積極的に活動することができた。パターゴルフでは、ボールをパターで探りながらホールまで運ぶのを交流相手校の生徒に声掛けで誘導してもらい、交流相手校の生徒と一緒に楽しむことができた。

キーワード 知的障害、肢体不自由、全盲、情報保障、交流及び共同学習

2. 生徒の実態

A 生徒は、B 特別支援学校に在籍する高等部 2 年生の生徒である。知的障害と肢体不自由、視覚障害（全盲）が重複しており、生活全般において介助を必要とする。学校では車いすを使用しているため、教員が A 生徒の支援を行っている。

A 生徒は、身近な物や人の名前がわかって単語や二語文で話すことができるが、概念の理解は、非常に時間がかかる。また、左半身に麻ひがあり、A 生徒の身体を両側から支えて介助すると少し歩行できるが、自力での歩行は難しい。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B 特別支援学校は、地域の諸学校の特別支援教育の推進に関わるセンター的役割を担っている。C 高等学校とも巡回相談や連携会議などを通して連携を取っている。

【基礎 1】

- B 特別支援学校では個別の教育支援計画及び個別の指導計画を作成し、必要に応じて外部機関との連携に活用している。C 高等学校との交流及び共同学習では、対象生徒の個別の教育支援計画に記載された配慮事項や必要な支援について、B 特別支援学校コーディネーターが C 高等学校の特別支援教育コーディネーターを通して、関係職員に伝達した。【基礎 3】
- C 高等学校にはエレベーターがないため、肢体不自由のある生徒が参加しやすい 1 階部分の教室で学習できるよう、調整を行った。【基礎 5】
- B 特別支援学校と C 高等学校の交流及び共同学習は 2 年目を迎え、さまざまな障害のある生徒が参加することで、C 高等学校の職員の理解も深まっている。【基礎 8】

4. 合意形成のプロセス

A生徒の保護者から、生活全般において、支援の必要性をその都度A生徒本人に確認してから支援にあたってほしいという申出があった。また、C高等学校との交流及び共同学習についても同様に、「A生徒が楽しく有意義に活動するための支援をお願いしたい。」との申出があった。そこで、A生徒の支援にあたっては、楽しく活動に参加するために必要な情報保障とA生徒本人の意思を確認してから援助を行うことをA生徒の保護者に説明し、合意を得た。

5. 合理的配慮の実践

- C高等学校の「生涯スポーツ」の授業で、パターゴルフを体験した。片手操作では遠くへ飛ばすことが難しいのと飛距離が目を確認できないことに対して、A生徒だけ、ホールの近くから打てるようにルールを確認した。【合理①-1-1】
- C高等学校の「英語」の授業で、事前の打ち合わせで、視覚で確認できなくても聞いて楽しめるようなゲームの工夫をお願いした。また、自由に移動する集団ゲームにおいては、A生徒の正面に来たら自分から声を掛けて相手を確認できるように進行を補助した。
- A生徒の心理的な不安感を軽減するため、交流及び共同学習の班編制の際に、A生徒と会話ができるなじみのある生徒を同じグループにするように配慮した。また休憩時間に支援にあたる教員がC高等学校の生徒に話しかけることで、A生徒も自然に会話に入れるように導いた。【合理①-2-3】
- A生徒への合理的配慮については、B特別支援学校のコーディネーターがC高等学校の特別支援教育コーディネーターと事前に打ち合わせを行い理解と協力を求めた。その情報はC高等学校交流及び共同学習の担当者間で共有された。【合理②-1】
- 交流及び共同学習を行う前に、事前にC高等学校の生徒に、A生徒が楽しく活動に参加するために必要な情報保障と、A生徒本人の意思を確認してから援助することの大切さについて説明した。【合理②-2】
- C高等学校での活動は、全て1階で行った。また、段差がある所では、安全に留意しながら車いすごと抱えて移動した。【合理③-1】

6. 本事例の成果と課題

C高等学校との交流及び共同学習では、C高等学校の生徒がA生徒の情報を保障するために積極的に関わりをもつ様子がみられた。また、A生徒もリラックスして活動に参加でき、自信がもてたのか主体的な参加の様子もみられた。